

復興ニッポン cha・cha・cha!

被災地の復興のために汗を流し、知恵を出している災害ボランティアの頑張りをお伝えする < 支え合い、助け合い、協働 > のための情報紙です。「みんなは、どんな活動しているの?」今すぐ知りたい、アイデアや取り組み。災害ボランティア最前線からお届けします。(※chaは「care」「help」「act」の頭文字)
発行：仙台市災害ボランティアセンター

◆災害ボランティア・スナップ◆

被災者の方を応援するため、1日でも早く普段通りの生活を取り戻していただくため、活動する災害ボランティア。活動の様子を、写真でお伝えします。

- ◎避難所で話を聞きながら肩もみ。避難されている方もリラックスして、自然に笑顔が浮かびます。(上左)
- ◎保健師さん、心のケアをする方など、専門知識を持ったスタッフ、ボランティアさんも頼りになります。(上中)
- ◎IT機器を使いこなして活動支援する災害ボランティア。自前の道具だそうです。(上右)
- ◎避難所を過ごしやすくするため、地域の皆さんが自ら約束事を決めて自主的に運営。(下左)
- ◎避難所で受付しているのは、地元の中学生们たち。元気な声が励みになります。(下右)



◆復興ニッポン cha・cha・cha! ネーミングの秘密◆

この応援紙のネーミングにもなっている「ニッポン cha・cha・cha(チャ・チャ・チャ)」のかけ声は、実は仙台からブレイクしたと言われています。それは、1981年6月23日に宮城県スポーツセンターで開催された、ワールドカップバレーボールの日本 VS アメリカの試合でのこと。全日本代表選手の軸だった三屋裕子さんによれば、三屋さんが腰を強打して動けずいたとき、会場から「三屋! 三屋!」の大合唱がはじまり、自然と「ニッポン、チャ・チャ・チャ」のコールが起きたといいます。仙台発の「ニッポン・チャ・チャ・チャ」。仙台市災害ボランティアセンターでは、「cha」に care(気にかける)、help(助けあう)、act(ともに行動する)という意味を込め、ボランティアのみなさんの応援紙を『復興ニッポン cha・cha・cha!』と名付けました。

◆現場で活動する災害ボランティアの声をお届けします◆

自分が震災を体験したことで、また、テレビや新聞などで震災の映像を見て、「助けたい」「役に立ちたい」そんな一心で駆けつけてくれた災害ボランティアがいます。今回は、被災者支援の現場で直接聞いた彼らの思いや感じたことをお伝えしていきます♪



実は、昨年の11月に災害ボランティアセンターの実施訓練をしたばかりだったんです。

【災害ボランティアセンター運営スタッフの声・こえ】

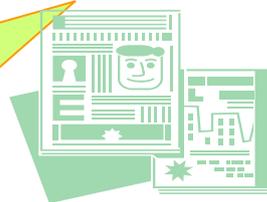
災害ボラセンの運営のために30～40人が汗を流しています。

そのおかげで、今回の災害では迅速にスタートすることができました。泉区災害ボラセンが立ち上がるまでは、泉区もカバーしていたので、泉、八乙女、小松島、東六番丁、折立地区など広範囲に渡って活動していました。ボランティアに貸し出す自転車が不足したので、運営スタッフの自転車を貸し出して、どうにか賄ってきました。今日40台の自転車が届いたので、しばらくは足りると思います。ただ、最近は折立地区など遠方の依頼が増えてきたので、慢性的な自動車不足とガソリン不足は考えられるでしょう。

青葉区ではボランティアを1日に180～190人ほど受け付け、常時30～40人くらいいます。学生、市役所OB、主婦がメインです。依頼受付班と総務班は職員が担当していますが、それ以外は全てボランティアで運営しています。運営スタッフが自主的に、依頼者からの「感謝の言葉」を壁一面に張り出しているのが、被災地へ活動に行くボランティアの励みにもなっているようです。(青葉区災害ボランティアセンター長 庄子さん 3/27)

【災害ボランティアセンター運営スタッフの声・こえ】

日々工夫！日々改善！
「ニュースレター」も出しています。



当初は体育館のアリーナで運営する予定でしたが、天井が大きく剥がれていたので、急きょ2階席の通路で各種手続きや説明をすることになりました。

はじめは、被災者の方から頂戴した依頼のニーズに、災害ボランティアの方をマッチングして送り出すだけでした。ですが、現場を経験するとわかってくることも多くあります。毎日行っている反省会で出てきた意見を、その後の活動に反映するため、説明ブースを増やすことにしました。スタッフの提案で発行しはじめた「ニュースレター」も2号目。ボランティアの気持ちが、非常にまとまっていると思います。(男性 30代)

【災害ボランティアセンター運営スタッフの声・こえ】

一人暮らしの高齢者からの
ご依頼が多いんです。

被災者の方に青葉区災害ボラセンを知っていただくために、チラシをまくなど積極的にPRしています。青葉区という市街地のせいか高齢者の一人暮らしの方

からの依頼が目立ち、倒れた家具を起こしたり、冷蔵庫など重い電化製品を移動したり、といったケースが多いですね。力仕事だから男性と決めつけず、あえて女性ボランティアも加えて、話し相手にもなるチーム分けを心がけているところです。

(男性 50代 社協職員)



【災害ボランティアの声・こえ】

気仙沼から仙台へ
2日連続で参加中です！

父の会社が気仙沼なので、今まで会社の片付けを手伝っていました。ようやく落ち着いたので、災害ボランティアに参加しました。今日で、2日連続です。一緒に参加している外国人の知人は日本語があまり理解で



きないので、一緒のチームで依頼者宅に向かうところです。行って来ます～！

(女性 30代)

【災害ボランティアの声・こえ】

私も夫も通訳ボランティア

自宅の被害がそれほどなかったため、地震の翌日から仙台市多言語支援センターで、ドイツ語と英語の通訳として活動していま

す。食べ物や飲み物の調達サポート、安否確認などをしていました。多言語支援センターが落ち着いたので、青葉区災害ボラセンに場所をかえて、引き続き通訳ボランティアをしているところです。夫も通訳として、ボランティアに参加しているんですよ！(女性 50代 主婦)



青葉区のガスが復旧していないのが心配ですが(3/27 現在)、

家の片付けが終わったので参加することにしました。テレビで流れているテロップで青葉区災害ボランティアセンターのことを知り、今回が初参加です。最初はどうかと迷っていましたが、とりあえずやってみようと思って来てみました。

普段は、病院で看護師をしているので、

何かできることはないかと思っています。 (女性 30代 看護師)

【災害ボランティアの声・こえ】

テレビのテロップで知りました
迷ったけどやってみます！



編集後記

あっという間に震災から3週間が過ぎ、気付くとカレンダーも4月に変わりました。もちろん、月日だけでなく被災地の様子も、被災された方のニーズも日々刻々と変化しています。この応援紙のネーミングに込めた意味の通り、現地の人も全国各地から応援に駆けつけてくださった方々も、一人ひとりがお互いを気にかけて、支え合い、そして共に行動しています。おかげさまで少しずつ復興を実感する毎日です。

そんななか、少し残念に思うことがあります。それは、全国的に広まりつつある自粛ムードです。被災地を想っての事と承知しておりますが、ぜひ普段どおりの生活を送って頂きたいと私は思っています。

みなさんの明るさが、笑顔が、笑い声が私達の力になります！日本全国からその明るいムードの輪を東北に届けて欲しいと思います。そして、また東北にも笑顔が溢れますよう、心より願っています。(山田裕美)

発行：仙台市災害ボランティアセンター 広報班 黒田

編集：広報ボランティアチーム 遠藤、大谷、木村、佐藤、茂木、山田

連絡先：仙台市災害ボランティアセンター Eメール sendai - vc@poppy.ocn.ne.jp



災害ボランティア、ことはじめ！ 活動の7つのステップを紹介

●災害ボランティアって、どんな風にはじまり、どんな活動をして、終わりはどうなるのかな？
素朴な疑問にお答えします♪

- 1 ●受付は9時から。新規と継続別に受付です。
ぞくぞく災害ボラセンに集まります！



2 ●依頼があるまで待機。やってみたい活動が募集されたら手を上げてアピールし、チームを作り、活動の準備をします。



- 3 ●担当メンバーが決まったら、依頼内容を聞いて、場所を確認。そして、リーダーを決めます。
また、活動での注意点や心得も確認します。
活動で使う道具を受け取り、出発！



(右上へ進む)

- 4 ●移動手段は自転車や車。地図を見て現地へ！



- 5 ●依頼者と顔合わせ・打合せ。活動内容を確認。



- 6 ●活動では、救援物資も「よいしょっ！」



- 7 ●終了！災害ボラセンに戻り、報告書に記入。
お疲れさまでした！！

